



洪水と民衆の幻想——井上俊夫

青銅の男

はじめから誰もいなかったのだよ
お前がみたのは、まぼろしにすぎない。
村人たちはどっと笑って
工事現場へひきかえして行った。

それでは朱塗りの拝殿や石の階段が
なぜ濡れているのです
たしかに彼はここに坐っていた
ここで彼は不逞にも放尿したのです
かぶと虫よりも生なまぐさい彼の体臭が
まだ境内にたちこめているじゃありませんか。
娘は誰もきいてくれなかった弁明を
ひとりできりかえしながら
みれんがましく、鎮守の森にたたずんでいる。
樹齢二百年の杉のてっぺんが真っ赤に焼けて
強烈な初秋の陽が
野の果てに沈もうとしていた。

彼は青銅のたくましい身体の特主だった
手のひらだけでも畳一枚ぐらいの大きさはあった
彼はわざわざ奈良から駆けつけてくれたのだ
村の田を埋めた土砂など
またたく間にとりのぞいてみせると
やさしく娘に笑いかけた。

一列になって堤防を帰る
村人たちのすげ笠が焼け
肩にかついだ鎌が焼け
もっこりとんびん棒が焼け
くずれたわらじと
ぼろにひとしい野良着が焼けている。
誰も娘の言葉を正しいとは思わぬ
誰も娘の言葉をいつわりだとは思わぬ。

堤防のいたるところが洪水に破れて
村の田を埋めつくした砂は
眼もくらむばかりの広さで
落日の色に
美しく染めあげられている。

いわずと知れたことだが、私のこの詩は洪水にやられた江戸時代の農村の姿を描いたものである。堤防が決壊して田んぼが全部土砂に埋められてしまった。その土砂を人力だけでとりのぞこうとする村人たちの作業は絶望的なほどはかどらない。村人たちはみんないらだっている。女や子供たちまで復旧作業にかりだされているが、広々とした野良を埋めつくしたおびただしい量の土砂をとりのぞくには、これから何か月、何年かかるか見当もつかない。そうしたとき、ある一人の娘が村へ救援にかけつけてくれたスーパーマンの姿をみたわけだ。スーパーマンといっても、当時のことだから今日われわれがテレビでおめにかかるといふようなスマートな姿をしていない。それはおおむね奈良の大仏のような格好をしている。しかし、超能力を持っていることには変りがないのだから、この青銅の男が動き

だせば土砂などまたたく間にとりのぞいてくれる。娘はこおどりしながらこのことを村人たちに告げた。村人たちは半信半疑で、青銅の男がいるという鎮守へ集まってきた。案の定、青銅の男はいなかった。村人たちはいっせいに、デマをとばした娘を嘲笑した。それはまた一人前の男のくせに、小娘のいうことを半ば信じて鎮守までやってきた村人たちの自嘲でもあった。だが娘は村人たちの嘲笑に屈せず、必死になってスーパーマンが立っていた場所を示す。娘のあまりにも真剣な態度に村人たちは思わず笑いをひっこめる。ひょっとしたら、そのような人が自分たちを助けにきてくれたのかもしれないと思う。自分たちのように何一つ悪いことをせず真面目に生きてきた人間がこんなに苦しんでいるのを、神さまがみすてなさる道理はない、娘のいってることはほんとなんだと考えはじめる。だが、

かんじんの青銅の男がいつまでたってもあらわれないものだから、村人たちは前より2倍も3倍も重い足どりで工事現場へひきあげて行く。なぜ私はこのような詩を書いたのか。江戸時代の淀川の洪水を記録した古文書や地図の類をあさっているうちに、当時の農民が非常に苦しんでいたことがわかった。そして復旧工事の苦しきのあまり一人ぐらいうる超能力者が救援にきてくれたという幻想を抱いても、不思議ではないと考えた。それが詩を作る動機となった。この間のいわゆる47・7豪雨で私の住む大阪近郊都市も大きな被害をうけた。家の中に侵入してきた土砂や汚物を外にほうりだし、びしょぬれの道を道路でかわかしたりして悪戦苦闘している市民の姿をみて、この人たちもやはり江戸時代の農民のように超能力者の救援を夢みたのではないかと思った。

(作家)